

## クローズアップ

## 子どもたちを前向きに

## 周りの人たちも幸せに

NPO法人「AYA」代表理事

中川 悠樹さん(救急専門医)



「病気と闘っている、障がいと共に生きている、医療的ケアが必要である」子どもたちやその家族の人たちに前向きに生きてほしい——救急科・外科の専門医、中川悠樹さんはNPO法人「AYA」を立ち上げ、医療的ケア児や障がいのある子どもたちのサポート活動を展開している。さまざまなスポーツ、芸術、文化のイベントに参加できる機会をつくることで、子どもたちやその家族が楽しく過ごし、社会参加の輪を広げていく試みだ。中川さんにその活動に寄せる思いを語っていただいた。

(聞き手・池田知隆)

「AYA」とは

——「AYA」はどんな団体なのですか。

「子どもたちを前向きに、周りの人たちも幸せに」。そんなスローガンを掲げ、病気と闘っている子や障がいのある子やそのご家族の人たちが、社会のさまざまなイベントに参加できるように医療機関やボランティア団体の人たちといっしょに活動しています。

——いま、病気で闘っている子どもたちはどうのくらいいいるのですか。

きつかけもあり、私の人生に大きな影響を与えてくれました。医師として本人やご家族に何の責任もなく、不可抗力で病気になつてしまふ患者を多く見てきましたが、そいつた人たち、特に子どもたちに何かできることはないのかと考えて始めたのが「AYA」の活動です。

医療活動への道

——そもそも、どうして医者になるうと。

「子どもたちを前向きに、周りの人たちも幸せに」。そんなスローガンを掲げ、病気と闘っている子や障がいのある子やそのご家族の人たちが、社会のさまざまなイベントに参加できるように医療機関やボランティア団体の人たちといっしょに活動しています。

医療的ケアが日常的に必要な「医療的ケア児」は約2万人、長い治療生活を送る「長期療養の子ども」は約25万人といわれています。その子どもたちやご家族の願いの一つに「同世

代の子どもたちと同じような経験をしたい」ということがあります。

この「AYA」には、設立のきっかけとなつた「あやちゃん」の名前のほか、Action to Your Adventure:冒險への第一歩を踏み出そう!

・愛(A-i) × 勇気(Yuk-i)=明日(A-su)

への挑戦:家族や支援者からの「愛」と本人の「勇気」で、「明日」に向かって挑戦しよう!

・彩(あや):「彩(いろどり)」り豊かな人生を送る

う!……などの思いを込めています。

社会ではいま、SDGsやCSR(企業の社会的責任)への取り組みが広がり、多くの企業や団体も社会貢献活動を行っています。しかし、病気と闘う・障がいのある子どもたちへの支援については、「どうしたらよいのか分からぬ」という声をよく聞きます。私たちは、病気や障がいのある子どもたちやご家族と企業や団体の「架け橋」となつて、「病気になつたからこそ素晴らしい出会いがあつた」と、子どもたちやご家族に思ってもらえる社会を実現していきたいですね。

大学では全然勉強せず、何になりたいといふ思いはありませんでしたね。小児科など各診療科を回ったのですが、外科の教授に「お前は外科に向いている」と言われ、消化器外科を選択しました。初期研修2年間は関西で行いましたが、その後は医局に属さず、自ら首都圏の病院を選択し腕を磨く決意をしました。

——民間病院ではどんなことを。

首都圏に出てまずは三井記念病院(東京都千代田区)で研鑽を積みました。1年後には、より多くの症例を積むことを目的に、横浜労災病院(横浜市港北区)へ移りました。

大学では全然勉強せず、何になりたいといふ思いはありませんでしたね。小児科など各診療科を回ったのですが、外科の教授に「お前は外科に向いている」とと言われ、消化器外科を選択しました。初期研修2年間は関西で行いましたが、その後は医局に属さず、自ら首都圏の病院を選択し腕を磨く決意をしました。

——京都大学医学部ではどの診療科を選択されたのですか。

京都大学医学部ではどの診療科を選択されたのですか。

（筆者撮影）

6年ほど経った灘高校(神戸市)の2年生の末に亡くなりました。私が医師を志した

ころ、あやちゃんのお母さんから「できたら医者になって」と言されました。周りには医学部進学の生徒が多く、私はちょっと反抗心の強い人間だったので、医学部には絶対に行かないといと、バスケットボールやバンド活動に熱中していました。でも、そのことがあって医学部への進学を自然と決意しました。

尊敬できる上司に出会えたことで、外科医を

辞めようと決意しました。

——それから、どうされたのですね。



スポーツ観戦会場で

そのとき、医師をやめるかどうか、すごく悩みました。転職サイトに登録し、外資系のコンサルタントの道に進むことも考えました。でも、他の職業に進んだとしても、私は医者というレッテルを貼られ続けると思いました。なので、目の前で人が急に倒れたときに、なんとかできないと医者としてカツコ悪いなと思つたんです。そこで、他の職種に進む前に、数年間だけ救急科を経験しようと考え、外科から救急科へ転科しました。転科してからはワークライフバランスが変わりました。外科の場合どうしても緊急呼び出しがありますし、救急科では月数回の当直はあるものの、完全にシフト制なので仕事のオンオフがはつきりし

たとき、医師をやめるかどうか、すごく悩みました。転職サイトに登録し、外資系のコンサルタントの道に進むことも考えました。でも、他の職業に進んだとしても、私は医者といふうレッテルを貼られ続けると思いました。なので、目の前で人が急に倒れたときに、なんとかできないと医者としてカツコ悪いなと思つたんです。そこで、他の職種に進む前に、数年間だけ救急科を経験しようと考え、外科から救急科へ転科しました。転科してからはワーカーライフバランスが変わりました。外科の場合どうしても緊急呼び出しがありますし、救急科では月数回の当直はあるものの、完全にシフト制なので仕事のオンオフがはつきりし



スポーツ体験する子どもたち

た時期、どうしても他のことをやりたいという想いが強くなつておらず、惰性で働いてくことにキリをつけようということで、2021年3月に次のあてもないまま、病院を辞めることになりました。

——大きな決断でしたね。

その年の9月のことです。東京五輪で銀メダルを獲得した女子バスケットボール代表チームが「アジアカップ(ヨルダンで開催)」に出席するので、同行する医者を募集していました。コロナ禍でいつたん海外に出来ば、帰

国際に3週間の隔離が求められ、通常勤務の医師はだれも行けません。私はバスケットボールが大好きでしたし、喜んで手を挙げさせていただきました。結果、幸いなことに帶同医師を選んでいただけました。

日本女子チームのフル代表ですから、監督からコーチ、トレーナーまでみなさん超一流です。みんなの話がとても面白く、それまでにない体験をしました。あるとき、若いトレーナーから「将来、何したいんですか」と聞かれたのです。そのとき、自然と「実は、障がいがあり、医療的ケアが必要な子どもたちが喜ぶ機会を提供していきたい」とボロッと口にしました。あやちゃんとお母さんのことが鮮やかに浮かび、「私はやっぱりそういうことをしたんだな」と気付けた瞬間でした。

そして、そろそろ何か違うことをしようかなと思っていた矢先、コロナ禍に見舞われました。ちょうど上司が災害対応のプロフェッショナルで、あのダイヤモンドプリントセス号の対応に追われました。何か違うことをやるのは、コロナが一段落してからだと決心し、救急医として勤め続けました。コロナが何か分からぬい当初は、本当に仕事が怖かったです。コロナの波がある程度おさまってい

——そしてAYAの設立に。

コロナ前までは、横浜で働いていたこともあり、横浜ビー・コルセアーズというバスケットボールチームとイベントを何度も実施していました。クリスマスに病院の小児科病棟に選手やチアに来てもらったり、試合日に会場でA



選手と交流する子

スポーツ・芸術・文化を柱に

——AYAの活動の原体験って何かありますか？

あやちゃんは吉本新喜劇が大好きでした。あやちゃんは余命1年といわれていましたが、10年ほど生きることができました。ただ、その間にあやちゃんが吉本を見に行く機会はなかったのです。連れ出す上で、周囲の目線、施設の受け入れ、移動のアクセシビリティなどすべてをクリアするのは絶対無理だと思っていたようです。ただ、あやちゃんが亡くなつて以降、お母さんは、無理をしてでもあや

D(自動体外式除細動器)講習のイベントをさせてもらつたりです。コロナで活動は途絶えていましたが、ヨルダンでの気付きが、自分の想いを再燃させてくれました。あやちゃんの兄に「一緒にやろう」と呼びかけ、翌2022年1月1日のSNSで立ち上げを宣言したのです。その後、横浜ビー・コレーブを協力を得て、病気や障がいのある子どもたちのスポーツ観戦や映画鑑賞するイベントなどを開いていくうちに社会的にニーズがあるとわかり、2023年6月に法人化しました。

地域福祉をめぐって行政はパブリックな活動でないと支援しにくいようです。しかし、映画鑑賞やスポーツ観戦などは遊びの一つとはいえる、普通の家族ができることを支援できない社会はハッピーではないと思います。

一方、映画館やスポーツチームなど受け入れる側は「何かしてあげたい」と思つていても、何か事故が起きはしないかと気にします。でも、医療者がその受け入れる現場できちんと対応すれば、受け入れ側のハードルは一気に下がるのではないかと私は考えています。

病気や障がいのある子どもたちや家族ども

ちゃんを吉本に連れていけばよかったです、といまだに後悔しています。そんな思いはどの家族にもしてほしくないです。

地域福祉をめぐって行政はパブリックな活動でないと支援しにくいようです。しかし、映画鑑賞やスポーツ観戦などは遊びの一つとはいえる、普通の家族ができることを支援できない社会はハッピーではないと思います。

一方、映画館やスポーツチームなど受け入れる側は「何かしてあげたい」と思つていても、何か事故が起きはしないかと気にします。でも、医療者がその受け入れる現場できちんと対応すれば、受け入れ側のハードルは一気に下がるのではないかと私は考えています。

病気や障がいのある子どもたちや家族ども



映画鑑賞の会場で

受け入れる側がお互いに理解を深めていくことが必要です。その子たちが社会への第一歩を踏み出し、「挑戦すれば何でもできるんだ」と前向きな気持ちになると、「挑戦すれば何でもできるんだ」と前向きな気持ちになれば、周りの人たちも幸せを感じるはずだと私は心から信じています。

### —印象に残っている出来事は。

人間つて本当に感動すると、体がブルッと震えることがあると思います。あるバスケットの試合の前座で障がいのある子や医療的ケア児たちのダンスチームがコートで踊ってくれたのです。そのダンスパフォーマンスの姿もとても感動的だったので、パフォーマンスを終えた子どもを迎えたお父さんの喜びようが本当にすごかつたんです。後で理由を聞くと「この子がこんなに大きな会場でたくさんの観衆の前で踊れる日が来るなんて想像もしていませんでした。本当に嬉しいです」と。自分は大したことをしていませんが、こんなに喜んでくれたことが本当に嬉しく、鳥肌が立ちましたね。

また下肢が不自由な小学高学年の子をアーチャーのNBAの試合にクラウドファンディングで連れていきました。アメリカでの様々な経験が彼にとって非常にポジティブな影響を与えたようで、彼は今、絶対にアメリカの大学に留学すると英語勉強に一層励み、今までやっていた車椅子バスケでも、自

### —これからどんなことを。 医療の未来に向けて

自分が日本を代表するエースになる、と頑張っています。ご家族から子どもに影響を受け、私たち親も頑張らないと、と思わせてもらつてます」と言わると、とても嬉しくなります。

### —これからどんなことを。

1月に「AYAインクルーシブ映画鑑賞会」を静岡県磐田市の映画館で開きました。100席余りの劇場を貸し切って人気のアニメ映画を上映しました。劇場内は、医療機器から出る音も、車いすでの出入りも、大声を出しても大丈夫です。医師4人と看護師、救命士、看護学生それぞれ1人ずつがスタッフとして参加し、27組81人が映画を楽しみました。

春休みの3月からは、人気映画を週間に連続して全国で映画鑑賞のイベントを開催していくつもりです。いまのところ、私があちこち回つて対応できていますが、これからはでかけるだけ多くの医療関係者などを巻き込んでいきたいです。

今までのご縁を活かし、全国でバスケットボールの試合観戦のイベントを、またその他のスポーツ観戦のイベントも積極的に実施していくたいですね。その他に、音楽鑑賞会や旅行イベントなど、今後やっていきたいことはもりだくさんです。

向こう2年間ほどは、全国各地で様々なイベントを実施し、3年後には各地の交流が生まれるようにしたいですね。対象としている子や家族はどうしてもクローズドな世界に閉じこもりがちなので、私の頭の中では、これらのストーリーを描けていますので、実現で

きる世界だと信じています。ぜひ多くの方に応援していただきたいです。AYAのことを皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

### 中川 悠樹 (なかがわ ゆうき) 経歴

1983年6月、岡山県生まれ。  
2009年3月、京都大学医学部卒業。救急科専門医・外科専門医・JSPD公認スポーツドクター・医師会認定産業医・旅行医学会認定医など。  
三井記念病院、横浜労災病院での消化器外科・救命救急センターでの勤務を経て、ドクターヘリ添乗医、離島医療などを実践してきた。

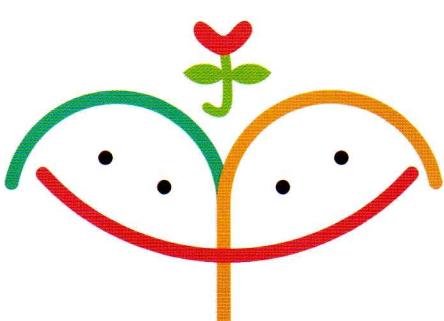
### 特定非営利活動法人AYA(NPO AYA)

東京都中央区日本橋兜町6番5号

ホームページは<https://aya-npo.org/>

<活動内容>

「病気と闘っている、障がいと共に生きている、医療的ケアが必要である」子どもたちとその家族に、様々な経験ができる場を提供している。



**AYA**